2018. 9. 26

自力解決について考える　　～校内研修会での意見交流から～

研修会で自力解決について意見が出された。

1　ケース1

自力解決の時間を取ると、分からない子が止まってしまう。理解の早い子と遅い子の差が大きいことから、理解の遅い子に手当や支援をおこなわないと進まない。どうすればいいだろうか。

→ 分からない子が止まってしまうのは、班の子に「ねえ、どうするの？」と聞けていないのではないだろうか。
聞かれた子が答えていない。一緒に考えていないのではないだろうか。

2　ケース2

課題を提示して、「何か分からないことある？」と尋ねると、いくつか質問や疑問が出てくる。それに答えたり、他の児童に問い返したりしていくうちに、課題の意味や解き方の見通しができあがってくる。すると、班の子と相談しながら課題解決に向かっていく。自力解決とはなっていかない。

→ 班の子と二人で、あるいは、班の全員で考えながら、課題解決に向かったとしても、それを“自力解決”と捉える。なぜなら、「分からなかったら班の子に聞きなさい。その子も分からなかったら一緒に考えてもよい。」と指示をしている。分からない子が一緒に考える。たまたま班全員が一緒に考えたと捉えればよい。
基本的な考え方として、「学びは個人である」ということを教師が持っていることが大切である。子どもの姿や動きに疑問を感じたら、「学びが個人」になっているかという観点から分析すればよい。